

6 空を見つめて日本を思う

—松本としのライフストーリー—

聞き取り：資料収集調査員 吉田 有見



中国から取り寄せた綿
で作った中国服を着て
自宅で撮影(2003年春)

松本とし(まつもと とし)の略歴

昭和5(1930)年	京都市で生まれる
昭和19(1944)年1月	父、母、姉、弟、妹の一家5人で渡満 吉林省敦化县額穆索青溝子開拓団に入植 看護婦養成学校に入学のため、単身で吉林市へ移動
昭和20(1945)年12月	母、死亡
昭和21(1946)年	吉林市で結婚。2男2女をもうける
昭和57(1982)年	弟の住む北海道へ二男と永住帰国
昭和59(1984)年	夫と長男家族の呼び寄せ 長女と二女の家族の呼び寄せ
現在	姉と妹も永住帰国 札幌市内在住

はじめに

松本としにとって、一番幸せだった時代は、生まれ故郷で遊んだ子どもの頃である。仲良しの女友だちと、夢のように楽しく過ごした毎日。としが満洲に渡ってもその友情は途切れることがなかったが、音信はやがて途絶えた。長い年月を経て再会することができたが、としは、2人の辿った人生の違いにただ驚くばかりである。

1. 渡満前

生い立ちと家族

松本としは、昭和5(1930)年9月28日に京都市左京区で生まれた。京都出身だけあって、いまでも京都訛りが言葉の端はしに現れる。家は京都大学の近くで近衛通りの「ちんちん電車」がすぐそばを通っているところにあった。大学病院の病棟の火事の際には、家の2階の西側の窓から火がカーッと赤く見え、それが今でも生々しい記憶として残っている。寺町らしく父は高野山のお坊さんこうやさんが着る袈裟を作る職人であり、お弟子さんも2人雇って、順調に生計を営んでいた。父はもともと東京出身であったが、関東大震災で両親を失い、単身で、火事で焼けた東京から逃げ、京都へ来て落ち着き、袈裟を作る技術を身につけた。その後、母と結婚し所帯を構えたのだった。隣の家には母のきょうだいである叔父夫婦が住んでおり、その叔母も内職で袈裟を作る仕事に携わっていた。

としは、4人きょうだいの上から2番目で、上に姉、下に弟と妹がおり、それぞれ2歳ずつ離れていた。他のきょうだいたちとは異なり、としだけが幼稚園へ行かせてもらった。それは、父から見て、としが賢く、しっかりしていたからだった。

父は家族思いであったが、気が短く、よく手を上げて母を殴ったり、叱りつけた。そんな時は姉と2人で泣く真似をして、父の怒りを抑えようと必死になった。

母は少し心臓が弱かった。としも母に体質が似たのか、身体はあまり丈夫ではなかった。近所にサーカスの一団が来て、家族で見に行くような時にも、ハラハラすると心臓に悪いと思い、1人で留守番をしたこともあった。

としは歌が好きだった。隣の叔母の家で聴いた「旅笠道中」や「名月赤城山」といった「股旅演歌」が思い出にある。父の弟子の実家に行った時も、「股旅演歌」を聴いた。

友だちと遊んだ「一番幸せな時代」

としにとって「幸せだな、よかったと思うのは、子どもの時」であり、「京都にいる時」だった。近所に仲のよい友だちがおり、小さい時からいつも一緒に遊んだ。小学校に行きクラスが違っても、それは変わらなかった。よく遊びに行ったところは京都大学病院の庭で、そこは春にはレンゲやスマイレが一面に咲いていた。2人はそれをとって編み、耳にかけたり、頭にかけてたりして遊んだ。家の前の通りでは、縄跳びやゴム跳びをして遊んだ。言い合いをしたり、喧嘩をした



詩と絵(1985年頃の作品)

覚えがない。としが「こうしよう」と言うと、その友だちも「うん、いいよ」と言い、「今日はやめて、あれ行こう」とその友だちが言うと、としも「うん、いいよ」と答え、いつも気持ちが通じ合った。今でも、京都にいて友だちと遊んだ場所が「夢に出てくる」ほど、「あの時」が「一番幸せな時代」だった。

働きながら夜学へ

としが国民学校の高学年になる頃には、第2次世界大戦が始まって、「お坊さんまでみんな出征に行く」世の中となり、袈裟を作る父の仕事も「だめになった」。町内会から父に、「兵隊さん」が着る衣類を作る工場へ行くようにという要請があった。父はそこで働くことになった。しかし、給料が少なく、子どもが4人いる家族の家計は苦しくなった。としにはもっと勉強したいという希望があったが、学費が「大変」なので上の学校には入れられないという。しかし、「働くから、夜学でも行かせて」と頼むと、父も熱意に負けて、堀川商工専修学校ほりかわという夜学に行かせてくれることになった。堀川女学校という「有名」な女学校である。姉は女学校には行かずに、すでに京都大学病院の薬局で働いていたので、としだけが上の学校に通うことになった。昭和18(1943)年のことである。

昼間は最初、姉と同じ京都大学病院の事務所で働いていたが、病院の解剖室の死体を見てから嫌になり、すぐにやめて、河原町の丸太町かわらまち まるたまちにある歯科医院で「歯科先生のお手伝い」として働くことになった。その家では「女中さん」も雇っていた。おやつおやつの時間にはとしも呼んでくれ、当時としては珍しいオレンジジュースを初めて飲ませてもらった。としは、お金持ちの生活を垣間見ながら、かいがいしく働いた。

満洲行きの父の決意

昼間は歯科で働き、夜は夜学に通って、としの望み通りに進んでいるかのように見えたが、それも束の間、翌年の昭和19(1944)年には、満洲に行くことになった。食物が配給となり食事もままならなかったからだ。政府から満洲開拓移住の募集があり、父は「満洲行けば、白いご飯いっぱい食べられる」と、母の「ここで、頑張ろう」という言葉や母の実家の猛反対にあいながらも、満洲行きを決意した。としたち子どもも反対したが、「ものすごい頑固」で「自分はこうだと思ったら、こうだとやってしまふ」性格だったので、誰も止めることはできなかった。それは別の角度から見れば、父の家族思いの現れだったのだろう。

2. 満洲移住

開拓団までの道のり

としの家族と一緒に移住することになった人たちは、大阪、和歌山、京都などの関西地域の5家族だった。福井県の敦賀つるがから船で、1月の冬の大荒れの日本海を船出した。汽笛が着くまで鳴り通して、としは3日間何も飲まず食わずだった。船員が「こ

ういう気候だから、いつひっくりかえるか分からないし、魚雷もあるから、みんな覚悟してください」と言いに来た。それを聞いて母は「死にに來たみたい」と嘆いた。最初から、苦難を強いられた旅立ちだった。としが13歳の冬だった。

船は朝鮮の清津に着いた。清津で、としは仲の良かった女友だちに葉書を書いた。そこから汽車に乗ったが、皆、降りる駅がどこか分からず、乗り越して黄泥河という駅まで行ってしまった。気がついて降りたところ、ちょうど貨物列車が来たのでそれに乗り、秋梨溝という小さな駅まで戻った。真冬の夜中だったので、寒さが一段と厳しかった。降りる駅を間違いながらも、朝鮮人が大勢住む額穆索という町の宿に辿り着いた。そこで1泊して、次の日、迎えにきた開拓団のトラックに乗って山奥まで行き、ようやく目的地に到着した。

青溝子開拓団の生活

としの家族が入植した開拓団は、吉林省敦化県にあった青溝子（としは「チンゴウズ」と中国語の音で発音）開拓団という。最初に印象についたのは、皆、部落を作って生活を営んでいることだった。としの家族が入った部落は、京都からの入植者が住んでいたのので、7号平安郷といった。開拓団の本部が真中にあり、学校や病院があった。最初のうちは、いわゆる「大陸の花嫁」が世話をしてくれて、「それこそ白いご飯いっぱい食べた」。としの目には、夫を兵隊にとられ、子どもを背中に背負って水汲みに行く彼女たちの姿が「可哀想」に映った。

開拓団の周りには泥で作った大きな塀がめぐらせてあり、夜になると門が閉じられた。塀の中には日本人が掘った井戸があった。開拓団の近くに、「日本人に追い出された」中国人の家族が住んでいたが、その中国人が天秤棒で水を汲みに来た時に、組長から「汚いから汲むな」と追い払われた場面を目の当たりにした。としの父は、そんな日本人に対して憤り、中国人のところまで水を汲んで持っていった。

中国人に差別をする日本人を尻目に、としの家族はその中国人と「付き合い」をもったので、「終戦のとき、すごく助かった」という。また、日常の暮らしの中で豚を殺すようなこともしなければならなかったが、父も母も京都での生活からは豚の殺し方など知る由もなかったのので、その中国人に頼んできれいに処理してもらった。「足としっぽ」だけで、「頭と内臓」はいらぬと言うと、その中国人は非常に喜び、頭を全部きれいに切って持ってきて、次は、味付けした豚の血を入れた腸を持ってきてくれた。としは、彼らと接することによって、中国人の食生活や習慣に触れて、生まれて初めて異文化の生活を体験した。中国人はお膳を出さずに食べることや、大きな臼をロバが挽くところも珍しかった。とうきびの粉と大豆の粉を混ぜて焼いた主食をとしにも食べさせてくれた。「美味しかった」。

開拓団では、見るもの、聞くものが珍しい生活が始まった。としの家族も鋤で農作業を始めた。母は開拓団の仕事が辛かったのか、身体や足がむくみ、オオバコを煎じて飲んでいて。としも母がオオバコを採るのを手伝った。

しばらくすると、「本部に学校があるから、ちょっと習え」と、父が言った。とし

は喜んでその学校に行くことになった。学校のある本部はとしの住んでいる部落からは遠いので、月曜から金曜は宿舎に泊まり、土曜と日曜に家に帰る生活が始まった。その地域は治安が悪かったので、家に戻ってくる時は、寄宿舎の他の生徒と一緒に戻ってきた。家に戻ると、母が洗濯をしてくれたり、破れた衣服を縫ってくれたりしてくれた。最初は、としだけが学校に通っていたが、そのうち、弟と妹も「農作業よりも」学校に行きたがり、結局、姉を除いた3人の子どもたちが学校へ行くことになった。学校では簡単な中国語も習った。としの同級生は女子が4人で男子も4人だった。昭和19(1944)年の春から1年間だった。

第8次青溝子開拓団

第8次青溝子開拓団は、吉林省敦化県の秋梨溝駅の北東約50kmに入植した三重、滋賀、京都、大阪、奈良、和歌山の混成開拓団である。この開拓団の避難状況は、8月18日に入植地を出発、額穆索、黒石屯^{こくせきとん}を経て秋梨溝に集結し、約20日間滞在した。当時秋梨溝には、数千名の各地からの避難民が集結して大混乱の状況にあった。

9月12日のソ連軍の命令により、一般避難民数百人と合流して14日に帰団した。その後、現地生活に耐えかね、大部分の者は11月中旬までに吉林に出て越冬した。その越冬状況は、大部分が極端な掠奪により被服寝具等を失い、むしろ等の上で起居していた。

(満洲開拓史刊行会編集発行「満洲開拓史」(昭41.4.17発行)より要約)

吉林の看護婦養成所へ

学校を卒業する時に、としは先生から推薦状を書いてもらい、吉林にある看護婦養成所に行くことになった。先生から卒業後の予定を尋ねられ、「できることを勉強したい」と言った。その願いがすぐに叶えられた。としは、開拓団では農作業をほとんどせずに好きな勉学に励むことができた。そして、昭和20(1945年)4月、青溝子開拓団を後にした。としは14歳だった。

としが入学した養成所は中国人や朝鮮人も働いている病院の看護婦養成所だった。としたち学生は午前中、いくつかの外来で見習いをして、午後から授業を受けた。しかし、養成所での勉強は「たった4か月」で終わりとなった。

3. 敗戦後

ソ連兵から逃れて

としにとっては、終戦は、何も分からない状況の中、突然やって来た。ソ連兵が飛行機でビラをまいた。ビラには、日本語で「日本国無条件降伏」と書かれてあった。としは、それでも「ぼやっとして」、日本が負けたのが信じられなかった。養成所の友だちの父親で、吉林の町で秘密工場の係をしていた人が集団自決をした現場を見に行き、「日本が負けた」ということを否応なしに知らされた。

その時から、としたち養成所の学生にも悲劇が始まった。見習い中に教えてくれた

外科の婦長が危険を察知し、としたちを看護婦養成所から、満鉄病院に連れていくことにした。養成所の黒いビロードのカーテンを「一人ひとつずつ、どこで寝るかどうかわからないから、持ちなさい」と言い、皆に渡した。そして、金庫に入っていた札束を出し、「大事にしなさい。変なことに使わないで」と全員に分けてくれた。

その日はずっと食事ができなかったが、遅くなってから病院の宿舎で全員仲良く輪になって食べようとしていたところへ、ソ連兵が入って来た。国民党の兵隊が連れてきたのである。皆、部屋の隅に逃げ、婦長がその前に立ちはだかって学生たちをかばってくれた。国民党の兵隊が中国語で来いと言って学生たちを連れて行こうとしたが、婦長はロシア語で「これでかんべんしてくれ」と言い、自分がはめていた腕時計や指輪をはずしてソ連兵に渡した。ロシア人は「にこっと」と笑い、その日は誰も連れていかれることはなかった。しかし、病院の宿舎も危ないということが分かり、食事どころではなくなって、すぐに病棟へ移動することになった。「もう、毎日寝るところがわからない。どこで寝てるのか。今日はここ、明日はここ」と、逃げ惑う毎日だった。

満鉄病院では、日中は通常に病院が営まれていた。日本人が経営しているので、「そこまでは中国人、入ってこなかった」。しかし、夜になるとソ連兵がやって来た。鍵をかけてあるので、ガラスを銃で割り押し入ってきた。婦長の合図であちこちに逃げ回った。ある時、ソ連兵が帰った後に点呼をすると、1人足りなかった。そうして、だんだん人が少なくなっていった。ソ連兵は「綺麗な日本人」を連れて行く。ソ連兵の目をそらそうと、皆、髪を切って、丸坊主になり、顔に炭を塗った。学生たちのうち年長者は17、8歳になっていたが、としはその中では年が若かったせいか、運良くソ連兵から逃げ延びることができた。

収容所生活

そんな矢先に、父と母がきょうだいたちを連れて、としを頼って吉林までやって来た。弟は吉林の駅で、中国人から丸裸にされて、何も身に付けていなかった。妹も靴を脱がされて、中を調べられたという。母も頭の鬘の中に隠していた指輪か何か大事なものをとられたという。母は、としの顔を見ると、「へなへな」と倒れてしまった。もうその時すでに「母はだめだった」。

両親やきょうだいたちは、もともとは陽明ようめい小学校だったところの収容所に入った。母は着いた時にすでに具合が悪かったので、すぐに満鉄病院に入院した。しかし、小さな妹（三女）のことが心配で、「帰ったら何もないよ」と皆が反対したのにもかかわらず、すぐに退院してしまった。としは、しばらく満鉄病院に留まっていたが、父が「もうそろそろ日本に引揚げだから、どうする」と言いに来たため、収容所で引揚げの時期を待つことにした。

収容所の暮らしは「最初はよかった」。寒くはなかった。しかし、9月の末頃から、赤ん坊や子どもたちが次々に亡くなっていった。そして、グラウンドに埋められた。としと同じ開拓団で同じ学校に通っていた人もずっと横になって寝ていたが、ある時

ふっと立ち上がり2、3歩いて、ばたっと倒れてそれっきりだった。どこも、避難民で溢れており、食べ物がないので栄養失調になり、お風呂に入れないので汚く、シラミがわいて「すごかった」。「引揚げるんだったら、難民所に行くよ」と言って、收容所に行ったとしてであったが、引揚げるつもりが「それが帰れなかった」。そこで、一冬、「ひどい目にあった」。收容所は昔の体育館で、火もなく、板張りで、その上にむしろを敷いただけであった。衣類は、全部夏のままだった。としには満鉄病院の制服があったので、多少は増しだった。

收容所の外で、いつ帰れるとも知れず、悲しげに「ラバウル小唄」を歌っていた男女がいた。その姿が忘れられない。

姉と働く

としたち家族は、「配ったお金」をできるだけ節約しながら使っていたが、だんだんそのお金もなくなり、食べる物もなくなっていった。母と小さい妹以外は、食べ物を探しに日中は收容所から出て、夕方には戻って寝るという生活が続いた。としと姉もそれぞれ別々に食べ物を探して町を歩き回っていたが、ある時偶然出会い、どこか働きに行こうということになった。正月用の飾り物を作るところで人手が足りないということを姉がどこからか聞いて知っていたので、そこに働きに行くことにした。收容所を出る時に、寝ていた母に「ちょっと働きに行くから、待ってて」と言葉をかけた。しかし、その時すでに母は衰弱しており、「だめだな」としは思った。

としと姉が見つけた仕事は、「福」という文字や、「昔の^{さんごくし}三国志に出てきた、ああいような格好」をした人の絵を印刷する仕事だった。雇い主は中国人だったが、言葉が分からなくてもできる仕事だった。すでに2人の既婚の日本人女性が働いていたが、としと姉が加わり、4人一緒に住み込みで働くことになった。1人の女性は若く綺麗で、いつも「^{かんたろうつきよ}勘太郎月夜」を歌っていた。としは、「歌って歌って」と言ってせがみでは、歌ってもらっていた。

病気とアヘンの煙

しばらくして、としは身体の具合が悪くなった。雇い主の奥さんが「病気だから、怒らないから寝てなさい」と布団を敷いて休ませてくれた。咳が出て、痰の中に血が混じっていた。後になって分かったことだが、風邪から肺炎になっていたらしい。

としがオンドルの端で布団に入り寝ていると、皆の休み時間に、部屋に誰もいなくなるのを見計らって来たのか、1人の顔色の悪い男が入ってきた。頭の大きいキセルにタバコらしいものを詰め込み、ろうそくの火をつけて、しばらく「ぐちゅぐちゅ」させた後、火を消し、それを吸い始めた。「白いような、青いような煙」が部屋を漂って、吸い終わったら、その男は出ていった。「ちょっと変わったタバコ」だと思ったが、その時から咳が出なくなった。としは、その怪しげな人物を怖いと思うより、「明日、来てくれるかな」とそのことに意識が集中するようになった。その男は3日間来て4日目からは来なくなった。「普通のタバコじゃないと思った」ものはアヘン

だった。としとその男が口を交わすことはなかったが、としはそのアヘンのお陰で、布団から起きられるようになった。起きて皆が働いているところに行き、姉に「(仕事を) やめよう」と言った。収容所の母のことが気になったのである。雇い主は快く許してくれ、多少の給金ととうきびの皮で編んだ靴と防寒になった綿入れの服をくれた。

母の死

収容所に戻る時は、寒さが一層厳しく、寒いより痛く感じるほどで「足が猫にかじられたみたい」な感覚だった。途中で、雇い主からもらったお金でホヤホヤの小さな肉饅頭を母に買い、凍ってしまわないように、姉が懐に入れて持ち帰った。母とはまだその時話ができたので、暖かい肉饅頭を勧めた。横になっていた母は、目を開いて「食べない」という素振りをしたが、「お水、ちょっと飲みたい」と初めて口を開いた。母は少しだけ水を飲んだ。その晩、としは母の横に背中と背中を合わせて寝た。しかし、母の身体に温かみがなくなり、まだ息はしていたが、身体中のシラミが全部這い出てきたのに気がついた。姉がそのシラミをとりながら、母に「何かお水飲む？」と話しかけたが、すぐに瞳孔が開き、亡くなった。昭和 20(1945)年の暮れであった。

母が亡くなって、泣いたのは姉ととしだけだった。どこからかもらったお湯で母の顔を拭き、少しお化粧をした。爪を切って髪の毛を切り、大事にハンカチに包んで姉が持った。凍るような寒さの中、父がセメント袋を2つ持ってきて、母の身体を包んだ。男2人にどこかに運んでもらうように頼んだ。弟が出口まで送っていったが、出ることができない寒さだった。

母の亡くなった日にはもう食べ物もなく、残っていた僅かなコウリヤンの粉で小さな「百円玉みたいな」団子を作り、5人で食べた。一日中何も食べていなかったが、「お腹がへった」という感覚はもう分からなかった。

母が亡くなった後、家族はばらばらになってしまった。収容所の外へ食べ物を探しに、父が出たり弟が出たり、しまいには全員が出た。ある時、としが戻ると誰もいなかった。

4. 「残留」

Mさんと養父母

としが食べ物を探して歩いている時に、Mさんという日本人の女性と会った。同じ開拓団の人で大阪出身だった。Mさんは中国人の「二号さん」になっていたが、としはMさんとは日本語で話せるので「やれやれ」と喜んだ。Mさんは「旦那さん」と「一号さん」を「これがお父さんで、お母さん」ととしに紹介した。としも「そんならいいわ」とその家に泊めてもらうことにした。

そうした成り行きで、Mさんの「旦那さん」が養父で、「一号さん」が養母になっ

た。としは、Mさんがいたお陰で「精神的に」助かった。2人とも関西出身なので「関西弁でベラベラ」話し、言葉があった。「娘」だったとしに比べて、Mさんは子どもを「1人産んでいる」せいか、あちこちよく出歩いた。Mさんは綺麗で「ものすごく面白い」人だった。「旦那さん」がマージャンや賭博をやっている時に、そばに行ってお金をもらい、としを誘って市場に行き、美味しいものを買ってとしにも食べさせてくれた。また、「一号さん」が作ったお正月の御供え用のお団子を「お腹へった」と言って食べ、「一号さん」が帰ってきた時には、ねずみの泣き声を真似し、ねずみがとって食べたことにした。

としもMさんも特に働くわけではなく、養母にちょっとした家事を頼まれる程度であった。2人で石炭を持ってくるように言われて、納屋から運ぼうとして、石炭を入れた器を壊してしまった時には、「お正月前に割れ物が出るとは縁起が悪い」と、養母からかんかん怒られたこともあったが、その他にはとしにうるさいことも言わず、食事を与え、よくしてくれた。また、どこからかとしの居場所を聞いて、父と弟がとしに会いにきたこともあったが、養父母はそんな父や弟にもご馳走をしてもてなした。

「二号さん」だったMさんは、「旦那さん」から非常に溺愛されていた。当時、Mさんは28歳であり、「旦那さん」は親ほども年が離れていた。Mさんが発疹チフスになった時には「助からん」ととしには思えたが、漢方の先生を呼んで診てもらったり、「旦那さん」自らが薬を飲ませたり、頭に薬をつけたりと、「一所懸命」に看病をした。その甲斐があつて、Mさんはすっかり元気になった。

逃げる

「旦那さん」から大事にされていたMさんだったが、「これからどうするの」とある時、としに問いかけた。Mさんは「(自分は)こんなとこに一生涯ない。なあ、としちゃん、一緒に逃げよう」と、としに養父母の家から逃げ出す話を持ちかけた。「日本人の集まる所に行けばいいじゃない。何とかなる」と、Mさんはとしにも黙って先に逃げた。しかし、まもなく連れ戻されてきた。Mさんはこの後も何度か逃げたが、逃げても逃げても連れ戻された。「旦那さん」にとっては、Mさんは自分の庭を逃げ回っているのと同じことだった。Mさんは「旦那さん」に執拗に追いかけられたのにもかかわらず、日本に「帰る」と抵抗した。しかし、3回目に戻されてからは、諦めたのか、もうしゃべらなくなり、髪の毛もかまわず、お化粧もしなくなった。

Mさんが逃げると、今度はとしの番だった。日本人が引揚げる噂を聞くと、居ても立ってもいられなかった。としも、何度か養父母のところから逃げ出した。最後に逃げた時は「走って走って走って」、下駄の緒が切れるまで走った。切れた緒を抜いて、手にぶら下げて走った記憶を今でも鮮明に覚えている。

逃げて行った場所は、日本人が集まっているところで、昔は飲み屋だったり、芸者がいたところだった。としはその様子を見て、非常に驚いた。行くと1人の日本人が「2階へ行きなさい」と言う。ふすまがあり、少し開けて中を覗いてみると、宴会

の席のようにお膳が並んでおり、国民党の兵隊と日本人女性が交互に座り、飲んだり、肩を抱いたりする光景だった。案内した女性は「あんた見た？初めてでしょ。こうもしないと日本に帰れませんよ」と、としに言った。「こうしたら、食べさせてくれるし、お金もくれる」。「どうしても中国から離れる」ためには仕方がないと、としも思った。しかし、その女性はとしの年齢を聞くと、「ふん、小さいか」と言ってそれっきりだった。そこにいた日本人女性は、「20歳から30歳くらいの人」で、「全部、結婚してる人」だった。としがそういう光景を見たのは初めてだったが、国民党の若い兵隊たちが日本人女性と飲んで遊んだ後のことも想像できた。

としは、日本人の女性から、「娘になる人」を探している50歳くらいの中国人男性を紹介されたこともある。「見ただけでも怖そうな人」だったので、としはご飯だけ食べて帰ってきた。「この人の娘になる人、誰もいないから」と言われたが、「誰もいないのは、怖いぞ」ととしは思った。

としの居場所はすぐに養父に見つけられた。養父が父と偶然出会い、知られてしまった。その場所に養父が来た時には、「窓から飛び降りよう」とさえ思ったが、結局、養父母のもとに返された。父もとしが殴られるのを恐れ、養父へあっさり引き渡した。Mさんが養父に執拗に迫られてまで「帰る」と言い張ったのに対して、としには「ああいう度胸」はなかった。養父母は、としが1度逃げてからは、父と弟がとしのところへ来るのを嫌がった。としも外出することができなくなった。

山の奥へ

養父母はとしを早く嫁に行かせた方がいいと思ったのか、ある時、5、6人の若い男を連れてきて、としに引き合わせた。そのうちの一番年上の男がすでにとしの相手と決まっていたらしく、「二号さん」もとしに「この人の嫁さんになるんだよ」と一所懸命諭すように言ったが、としは「あんな年いった人、嫌だ」と首を振った。「私が選ぶ」と、5、6人の男の中で一番若い17、8の男を指して、「この人だったらいい」と言った。皆、げらげらと笑った。一緒に来た男たちは、結婚相手の友だちだった。としは、その時まで、誰と結婚するかなど、考えたことすらなかった。

少し経って、1人の男がやって来た。養父母がとしに「一緒に行け」と言うので、言われるまま、その男の後について、山を2つ越えたところの田舎に行った。その男は「旦那になる弟」で、連れていかれたところは「姉の家」だった。着くまでは分からなかったが、顔を見て、すぐに「(夫の)妹か姉さんの家」だということが分かった。

としは、収容所であんなに苦労しても、母の亡くなった時以外には泣いたことはなかったが、毎日、「泣いて、泣いて、泣いて、泣いて」、泣き通しだった。オンドルの上で窓の方を向いて正座し、泣いた。涙が止まらなかった。としにとっては「こーんな嫌なこと初めてだ。逃げようもない、山の奥」だった。

その当時、としは中国語がまだ分からなかったが、「主人の姉」は、「こんな人どう

するんだ。毎日、何もしないで、ご飯もろくに食べないで泣いてばかり」と言っていたらしい。後から聞いて分かった。1人、娘がおり、としに「遊ぼう」と言って、村に連れ出したが、そんな気持ちにもなれなかった。

泣くのをやめたのは5日目だった。「そうだ。日本に帰りたい。帰りたかったら、死んだらだめだ。もう逃げられないから」と思い直し、「ただでよその人のご飯食べるの、嫌だから、働いてやろう」と決心した。朝食は「主人の姉」が作っていた。姉はとしの顔を見て笑った。毎日泣いていたとしがやっとなにかする気になったと思い、ホッとしたのだろう。

としは、吉林に残留していた「日本人が全部引揚げ」るまで、その山奥の家にあずけられた。

父と弟の引揚げ

としの結婚相手は、としを姉のところにあずけたまま吉林の町で暮らしていた。ある日、田舎に住むとしのもとにやって来て、日本語を少しだけ混ぜた中国語で、「日本人は全部引揚げた」と言った。としは、その時、その男がはっきりと「あの人だな」と確認することができた。養父母の家で会った5、6人の男の中の一番年上の人だった。

としは久しぶりに吉林の町に戻った。外に買い物にも行かせてくれた。日本人が引揚げたことは聞いて分かってはいたが、父たちとお互いにはっきり別れを告げたわけではなかった。「生きているのか、死んでいるのか、気になって」仕方がなかった。としは、もしかしたらという気持ちがあったのか、町を歩いて、父の姿に似た人を見かけては追いかけて、「走って捕まえたら、違う」ということを何度も繰り返した。知り合いに似た人を見かけても、同じだった。それも諦めたある時、市場の通りを買い物をしようと歩いていたら、誰かは分からないが、後ろから人がついて来る気配を感じた。しばらくそのまま歩いていると、しまい「松本さんといいませんか？」と声をかけられた。50代くらいの綺麗なチャイナ服を着た女性だった。会ったこともないのに、自分の名前を知っているので、としは非常に驚いたが、「はい、そうですけど」と答えた。「お父さん、いますでしょ」と言うので、また「はい」と答えると、「帰られましたよ、弟さん連れて」と言う。そして、「お父さんが引揚げる一番最後に、手紙1通あなたに残していったんで読んでください」と言った。としはその女性の家について行った。「封筒の黄色い薄い紙に、とし殿と書いて」あった。まだ、読んでもいないのに、涙がいっぱい溢れ出てきた。父も、この手紙を書いた時には、涙をこぼしたのだろう。インクが滲んだ跡があった。手紙には、「お前はしっかりしてるから、何とかして日本に帰ってくれ。待ってるから、お前だけでもいい。姉も妹の方も諦めたから」と。そして、「父より」と書いてあった。それを見てとしは、父と弟は本当に元気で帰ったのだろうかと思った。その女性は、父と弟にお米と大豆を入れた細い袋を2つ渡したという。「どこか何となく似てる」ので、としに声をかけ

たのであった。一時帰国した時に、父にその時の様子を聞くと、「この人に何とかすれば、いつか会えるだろうと思って渡した」という。

姉と妹の消息

姉や妹の消息も夫がどこからか調べてきて分かった。夫は「気が大きい」ので、「姉さんのところ、行くか」と言った。としは大喜びだった。夫の姉が「よそ行きのチャイナ服」を出して、貸してくれた。姉は結婚して吉林の町に住んでおり、羊の毛を糸にする仕事をしていた。その後、姉の「旦那」は、姉ととしが日本語で話すことを怖がり、姉を連れて、出身地の山東省^{さんとう}へ逃げるように引っ越してしまった。としがそれを知ったのは、すでに姉がいなくなっていたことであつた。姉は手紙を1通書き、Mさんに託していった。一方、妹の方は、「あれこそ、ほんとうに残留孤児」だったが、子どものいない養父母にあずけられ、大事に育てられていた。

結局、3姉妹が中国に残留することになった。

5. 結婚後

結婚

としの結婚した相手は、常相郷^{じょうそうきょう}といった。結婚した1946(昭和21)年には、としは15歳で常は31歳だった。養父母がお祝いに綿入れの防寒服を作ってくれた。生地は日本人が残していった着物をほどいた矢絣の柄の着物地で、綿は新しいものを買ってくれた。ふわふわして暖かく、終戦以来、新しい衣類を持っていなかったとしは、非常に嬉しかった。

しかし、としは結婚しても、夫のことが「好きじゃなかった」。夫には「義理」があつた。父が、日本へ引揚げる前に、養父母の家の前を「うろうろ」していたので、気がついた夫が、ポケットに入っていたお金を全部与えたという。としと夫と一緒に暮らすようになって、何かの言い合いをした折に、としが「逃げる」と言ったことがあつた。その時、夫から「お前は半分の豚だぞ」と言われ、初めて分かった。当時、その地方の「中国人はだいたい1年に1頭の豚を殺し」、お金に換える。としの父は、その半分のお金をもらったのだつた。

としは夫の姉のいる田舎で6年暮らすことになったが、日本人が引揚げた後や内戦があつた時には、何度か吉林と田舎を行ったり来たりしている。夫は最初、吉林に残って瓦を作る仕事をしていたが、姉に「嫁さんもらったんだから、ちゃんと仕事しなさい」と言われ、やめて田舎に帰ってきた。結局、その村の村長をすることになった。銃もひとつもらって家においた。その当時は、匪賊がいたり、国民党が入ったり、八路軍^{はちろぐん}も田舎まで来るので、銃がなければ危険であつた。

1947(昭和22)年夏には長女が生まれた。生まれた時は吉林に戻っていたが、内戦があり、食べ物も何もなくなってきたので、「もう行かなきゃだめだ」と、生まれて2か月の長女を連れて、また夫の姉の住む田舎へ行くことになった。内戦のためいくつ

もの検問所があった。夫は「国民党にも八路軍にも知っている人がいるから」と、安心させるように言って赤ん坊を抱き、としはその後を言われるままに黙ってついていった。日本人であることを隠しながらの移動だった。

田舎での暮らし

としは夫の姉の家族と一緒に暮らし、豚やニワトリの世話をし、臼を挽いた。夫が村長だったので、コウリヤンなどの穀物はもらうことができた。豚を飼って売り、ニワトリを飼ってその卵と必要な物を交換した。飼っていた豚を売りに行くのは義弟だった。売って、油や塩を買う。夫は「何か事件があったら解決もするし」、「情」もある人間だったが、大酒飲みで博打が好きで、家にいることは少なかった。ある時、豚を売るので、夫の帰りを待っていたら、帰ってきた夫はお金をみな博打ですってしまったという。豚を売ったお金でも足りず、家にあった小豆や大豆までも車で持っていかれた。としは、美味しいものが食べられるのを期待して餌をやっていたことを思うと、腸が煮え繰り返った。家中の者が怒った。

としにいろいろ家事を教えてくれた義姉は流産続きの身体だった。姉のお腹が大きくなった時に、畑へ働きに行く姉をとしは止めたが、姉は「動いた方がいい」と聞かずに出かけた。心配していた通り、姉は流産しそうになって山から降りてきた。としは医者もいないこの村でどうしてよいか分からず、隣の人に助けを求めた。驚くことに民間療法で姉は流産せずにすんだ。しかし、ようやく赤ん坊が生まれたものの、義姉はその子が4か月になる時に、子どもを残して亡くなってしまった。医者にも見せていないので病名は分からないが、としはガンだと思った。義姉は、子どもを「頼みます」と言って亡くなった。としは義姉夫婦の子どもの世話をすることになった。

そのうちに、今度は義兄の身体の様子がおかしくなった。一緒に住んでいたのも、としが真っ先に気がついた。義兄はお金がないので、病院に行くことを諦めていた。しかし、としは大豆や小豆を売って病院で診てもらおうように説得した。としが勉強した看護婦養成所のある吉林の総合病院に連れて行き診てもらおうと、食道ガンであることが分かった。しかし、末期ガンでどうしようもなく、としは子どもだけではなく、病人の世話までしなければならなくなった。義兄は、だんだん食べることができなくなり、義姉が亡くなって1年もしないうちに亡くなってしまった。としは、自分の長女と一緒に義姉夫婦の子どもの乳を与え、3歳まで育てた。義姉夫婦にはとしと3つしか違わない娘がいたが、その娘が結婚して1年後に、妹であるその子を連れていった。としは、その頃には22歳になっていた。としにも、長女と4歳違いの二女が生まれた。

山のふもとに3軒が暮らしていた。よそに行くといっても、どこにも行きようがない場所だった。としは、満鉄病院の制服の下に着ていたシャツをあちこち繕いながら、大事に着ていた。夏の昼間はズボン1枚で、後は「真っ裸」で過ごした。今、振り返ると、「よくやったものだな」と思う。靴がないので裸足で歩き、足の裏はカチカチ

になっていた。見かねた人が下駄をくれたので、それを「減って減って減って」しま
うまで、長い間履き続けた。冬は、とうもろこしの皮で編んだ靴を履いた。「私の若
い時ってないですよ。何かしてる、生きるだけ、一所懸命してる」という毎日だった。

再び吉林へ

1953(昭和28)年、中国に残留している日本人の調査があるという知らせがあり、吉
林の町へ戻っても「大丈夫」だからと言われ、6年振りに吉林へ戻ることになった。
登録すれば、日本人として帰国できることになった。としの名前はひらがなで書きた
め中国では都合が悪く、「漢字にしてくれ」と公安局から言われ、同じ開拓団にいた
人の名前をもらい、「松本聰子」という名前で登録した。

公安局からは、何度も日本へ「帰ってもいい」という通知があった。1956(昭和31)
年にも引揚げがあったが、としは「それも帰れなかった」。子どもがいたこともあっ
たが、父からも弟からも何も連絡がないのに、「ふっと日本に帰って、どうして生き
ていくのかな」と考えると、帰ることができなかった。「我慢して、もうちょっと待
とう」と思った。

吉林に戻ってから三女が生まれたが、1歳になる前に亡くなった。そのうち、夫の
弟の家族も越してきて、一緒に暮らすことになった。1956(昭和31)年に長男が生ま
れた。

夫は吉林に戻ってから、酸素のボンベを病院に運ぶ運送業に携わっていた。長女が
学校へ上がると、博打や酒などの遊びはしなくなった。子どもたちにとっては、夫は
「大事なお父さん」だった。しかし、生活は楽ではなかった。「夫婦2人で稼がない
と、食べていられない」。だから、何でもした。「リヤカー引いて、野菜売り、果物売
り。食堂で働いたり、人のお手伝いさんしたり」。

1962(昭和37)年に二男が生まれた。家族は、としと夫、娘2人、息子2人の6人と
なった。二男が生まれた年に「一人っ子政策」が始まった。夫は、子どもは「神様」
があげたものだから、子どもができたなら「産めと言う」。しかし、としは子どもを
「育てるのは大変」なので「もう産まない」と心の中で決めていたので、ちょうどよ
いと思い、夫に黙って避妊の処置をした。二男が生まれてから、としはすぐにでも外
に仕事に行きたいと思っていたが、「小さい子どもがいる」と、夫が許してくれなかつ
た。そのため、マッチ箱を作ったり、衣服の綿を敷く内職をした。「貧乏のどん底」
に落ちた時には、「娘の髪の毛を切って売って、米に替えたこともあった」。としにと
って、「ただひとつの望みは日本に帰りたい、帰りたい」ということだった。「だから、
苦しいことでも、我慢してこられた」のだった。

としは、「一所懸命」働いたが、「3回詐欺にあって、2回スリにあって」、思い出
しても悔しい。最初は夫が、闇のお米を買うために、品物を見ないうちにお金を払っ
てしまった。よその人の分まで借金をしてお金を払ったのに、現物が来なかった。夫
は「気がいいから、すぐ人にお金を貸す」ような性格であった。としは、そんな夫を
腹立たしく思いながらも、知り合いの小児科の医者にお金を借りに行き、よその人の

分のお金は返すことができた。

とし自身が詐欺にあったこともあった。内職でセーターや帽子を編んで、1年間「やっと100元」たまった。日本のお金で「価値は100万円」はあった。夫の友だちにお金をあずけ、カシミアの生地を頼んだ。しかし、何の音沙汰もなかった。夫の友だちだと思っていた人は、「遊び友だち」だった。としは、何度も返してほしいと言いにいったが徒労に終わった。

引揚げた父と弟の消息

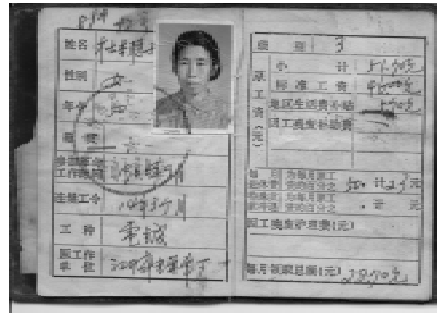
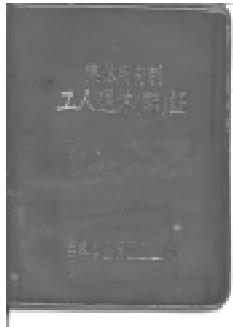
としは、1週間に1度は公安局に行き、残留者の名簿や日本から時々探しにくる人の中に父の名前を探した。しかし、父の名前はなかった。ある日、郵便局に行って、「日本に手紙出せますか」と尋ねた。「いやー、難しいんじゃないかね」と最初はそっけない返事だった。次に「けども、船便だったら着くかもしれない」という答えが返ってきた。それで、としは手紙を書いた。しばらく返事がないため、諦めていたところ、3か月後に返事がきた。それは叔母からの手紙で、「(父や弟は)あちこち引越ししているから分からないけれども、探してあげるよ」という内容だった。としは子どもの頃、家の隣に住んでいた叔母あてに手紙を書いたのだった。封筒には父と弟の写真が入っていた。としは、それを見て喜んで「飛び上がった」。2人は東京におり、弟は大学に行っていた。それまで、吉林を離れた後の父と弟の消息が分からなかったが、日本に無事に帰国できたことを知って、「みんな元気だな」と「やっと安心」した。

父と弟は最初は京都に戻ったが、実家の祖母が、母が亡くなった上に「3人の娘をおいて、ようやく2人で帰ってきたね」と泣くので、2人とも京都にはいられず、離れて転々として暮らしていたようである。その後、父からは「何か買う時に使ってくれ」と1万円の「為替」が送られてきた。

メッキ工場で働く

二男が少し大きくなり、としは外に働きに出ることに決めた。「町内会の会長さん」に近くのメッキ工場で働きたいと頼みに行った。最初、「あんたみたいの、小さいの、身体細いのに、あそこ重労働だからだめだよ」と言われたが、それでも「私、何でもする。人が2倍やったら、私3倍やる。何回も何回も運ぶ」と諦めなかった。熱意に負けたのか、「それならいいから、使ってあげる」と許可がおりた。結局、1966(昭和41)年から1980(昭和55)年まで、50歳で退職するまでの14年間、そのメッキ工場働くことになった。工場でのとしの仕事は、鍍取りだった。塩酸や硫酸などの劇薬を使う仕事だった。

メッキ工場からは、映画の券や、髪を切る券、お風呂の券を毎月もらった。もらった映画の券で、「主人の弟の嫁さん」と京劇を見に行ったり、日本の映画を見に行ったりすることが楽しみだった。また、お風呂の券を2枚か3枚ためて1年に1回、近



工場の退職証（1980年12月31日退職）／この写真の次頁以降に退職金を1990年12月まで受領した記事が記載

所に住む日本人女性と2人で個人風呂に行くのも楽しみだった。「大浴場は汚い」からだだった。公安局から、「日本人の友だちいますか」と聞かれたことがあるが、「いや、知っている人はいるけど、付き合いはしていません。私、仕事してるから」と答えるとしたが、「隣のおばあさん」が教えてくれた近所の「日本人のおばあさん」とは一緒にお風呂に行く仲だった。しかし、日本人との付き合いや近所付き合いは「必要がなかった」。子どもたちは子どもたちで遊ぶだけで、特にとし自身は付き合いをもたなかった。

住んでいた家はとしがメッキ工場に勤める前に引っ越した。長年一緒に暮らした夫の弟の家族とは別々に暮らすことになった。新しい家は汽車の線路に近かったが、眺めもよく、庭も大きかったので、花壇を作り、ニワトリやアヒルやガチョウなどを飼って育てた。

としにとって、心の支えになったのは、「生きていれば、日本に帰れる」という気持ちだった。「いつもね、主人が寝て、子どもたちが寝たら、電気消してね、私ひとり庭へ出るんです。庭広いから、椅子に座って、空見るんですよ。お天気なら、星がキラキラ光っているでしょ。あー、日本の空も一緒なものね。同じ地球だから、きれいに晴れて、星がキラキラ光っているのを、父や弟たちが見てると違うかなー。毎日、それを外で（見ていました）」。

文化大革命

メッキ工場で働き始めた1966(昭和41)年は、文化大革命が始まった年でもあった。文化大革命が始まると日本に住む父には手紙も出せず、また日本からも届かないため、すっかり連絡が途絶えてしまった。世界が閉ざされただけではなく、外を歩くと流れ弾が飛んでくることもあり、危険で出歩けなかった。としは文化大革命が始まってから、無口になった。職場で「どうしてみんな休んだ時しゃべってるのに、しゃべらないの?」と尋ねられた。としは「しゃべりたくない」と思った。うっかり口をすべらしたら、怖い時代だった。とし自身、日本人に会っても日本語を使わず、買い物に行って「あんたは吉林の人じゃないね」と言われても、「南の方です」と「ごまかして」いた。しかし、工場には公安局から連絡があるらしく、職場の人たちもとしが日本人であることを知るようになった。毎年、外国人登録の更新のために公安局に行かなけ

ればならなかったが、そのために外出する時も「ちゃんと出勤にします」と言ってくれた。職場の人たちは勤務中に「デモ」に参加することもあったが、としは外国人なので、「工場のお偉いさん」から「あんたは外国人だから、いいね。一人で留守番をしてなさい」と言われた。職場でも近所でもとしが日本人だと分かっても、差別をされたり、苛められるようなことはなかった。それは、としが他人に対して何も言わないし、意地悪くするような性格ではなかったからである。

文化大革命の時代には緊張した生活を送っていたが、ある時、町を歩いていると、京劇団の建物から、二胡の演奏する「浜千鳥」の曲が聴こえてきた。懐かしく、その窓の下にたたずみ、しばらく聴いたこともあった。

国籍

国籍については、「中国の国籍に入りませんか」と公安局から何度か誘いがあったが、変えるつもりはなかった。2人の娘もとしに中国の籍に入ってほしいと言ったが、としは、自分が中国の籍に入ったら『もう中国人です』って、なるの？やっぱり日本人は日本人でしょ』と言い、譲らなかった。娘たちは、中国共産党の「少年隊」や「青年隊」がする赤いスカーフを身に付けたかったのである。2人とも勉強はできたが、母親が日本人であるために、それは叶わなかった。そのうち、2人とも下放で田舎へ行かされることになり、戸籍まで移すことになってしまった。親が共産党員で何かの幹部であれば、早く町に帰らせてもらうこともできたが、としの娘たちは違っていた。娘たちが家に帰ってきた時に、足が凍傷で「ぐちゃぐちゃ」になって泣いても、としは国籍を変える気持ちにはなれなかった。しかし、としが日本国籍だったお陰で、逆に助かったこともあった。夫や子どもたちとは別の戸籍になっていたのも、食べ物の配給が2家族分となり、お米や卵も倍の配給となった。これでは得をした。

6. 日本へ

国交回復と里帰り

文化大革命は終わっていなかったが、昭和47(1972)年に日中の国交回復があった。通知が来て、残留していた日本人は帰れるようになった。「万歳したよ、みんな、私たち」。「頭いっぱい、毎日、日本に帰りたい」と、この日の来るのを待ち望んでいたからである。しかし、心にあることは、子どもたちにも夫にも打ち明けたことはなかった。長男はもう少しで田舎に行かされそうになったが、国交が回復したので、下放を免れることができた。

里帰りするには日本に親戚のいる人でないと許可されなかったが、としは父と弟の消息を知っていたのですんなり帰ることができた。文化大革命が始まって、日本との手紙のやり取りもできなくなっていたが、国交回復後、すぐに手紙を出した。父たちはあちこち引越ししていたために、手紙がなかなか届かなかったが、やっと連絡がとれるようになった。父と弟は京都から「遠くへ行っちゃへ」と遥か北海道へと住居を変えていた。その時、父は札幌におり、弟は同じ道内の登別のぼりべつという町で暮らしてい

た。

としは、永住帰国する前に2度里帰りをしている。最初は昭和49(1974)年であり、国交回復以降の残留邦人の3回目の帰国で、航空機による初めての便で帰ってきた。当時、未成年だった二男と2人で6か月間滞在した。父はその時、年金をもらいながらも、まだ袈裟を作る仕事を続けていた。父はとしの顔を見て、「お前が生きるとはなあ」と、としが生きているのが信じられない様子だった。「あんなに弱い身体」だったのに、「どうして帰ってこれた」と不思議がった。

2度目の里帰り

2度目に里帰りする前に、としは姉に声をかけた。姉とは別れて以来、ずっと会っていなかった。居場所は分かっているが、手紙を出しても姉の夫が破いてしまうらしく、返事がなかった。しかし、姉が住む山東省の村から吉林に来て暮らしている人から、「あなたの姉さん、元気だよ」と、姉の消息を聞くことができた。としは、姉に出した手紙が届いているのかどうか尋ねたところ、「届くわけないでしょ。あの男見たら」と言われ、誰から見ても姉の夫は気難しい性格だったことが分かった。としが3回目に手紙を出した時に、ようやく返事があった。姉の住む地域でも公安局から通知があったため、ほうっておくわけにもいかなかったようだ。姉は山東省の山奥に住んでいたのも、お米も何十年も食べたことがないというのを知った。としは「帰るか？ こういう機会、なくしたら帰れないよ」と姉に「ちょっかいを出した」。夫はそれを聞いて、「自分のことだけ、考えれ」と怒った。姉の夫は姉が逃げるのを恐れていたからだった。しかし、夫は持ち前の「気前」のよさで、お米の全国通用券を姉の家に送り、気づかった。そのためか、姉の夫も里帰りを許してくれた。

小さい時から養父母に育てられていた妹の方は、小学校卒業後、女学校に入り、さらに長^{ちやうしゆん}春の専門学校にも行った。としと姉から見れば、妹は「本当に幸せ」だった。哈爾濱^{はるびん}で就職したが、その後、大慶^{たいけい}に異動になった。妹の夫が共産党員だったので、としは自分が日本人であることから迷惑がかかってはいけないと思い、遠慮して連絡を控えており、里帰りも誘わなかった。

2度目の里帰りは、昭和51(1976)年に姉と一緒に帰り1年間滞在した。父はその時すでに具合が悪く、寝床からあまり起き上がれない状態だった。としは、最後に「妹に会いたいか」と尋ねた。父は「そりゃあ、会いたいさ」と答えた。しかし、としは、妹が日本語を全部忘れていたこともあるし、養父母がまだ生きていたこともあって、2人が会うことは無理だと思った。父はとしと姉が中国に戻ってまもなく亡くなった。82歳だった。

永住帰国

としは、50歳でメッキ工場を退職し、それから永住帰国の手続きをとった。としの一時帰国を許した夫だったが、永住帰国をしようとした時には、「帰らなくてもいいんじゃない。ちゃんと食べていけるし、落ち着いたし、みんな退職したし、ここにい

よう」と反対した。しかし、としの帰国の意志は固かった。夫も折れて、「中国にいる間と日本にいる間、中国で生活した方が長い。一緒に長い間暮らしたから、今度は俺も日本に来て暮らす」と言った。

最初は、夫と二男、そして、長男の家族を連れて帰国しようと手続きを進めた。しかし、法務省から、夫、長男夫婦、二男の4人の就職保証をとるようという要請があった。結婚していない二男と2人で帰国するのであればよいと言われた。そのため、「そうするよりしょうがなかった」。「帰ってから何とかして、探すから」と全員で来るのを諦めた。

永住帰国したのは、昭和57(1982)年の秋だった。としは52歳になっていた。父が亡くなっていたので、登別市内の弟の住んでいる近くの町で二男と2人で生活を始めた。

帰国する前にとしは、聡子という名前をもらった人が住んでいたところを訪ね、何か残したのがないかと探した。しかし、家もすでになく、仕方がないので、「その土」を袋に入れて持って帰ってきた。それをその人の妹さんに送った。

中国に残っていたMさんにも帰国する手続きを教えた。Mさんは読み書きができなかったので、Mさんの息子に中国語で手紙を書いた。その甲斐があって、Mさんは息子と帰国することができた。Mさんは出身地である大阪に住んでいるため、電話で挨拶程度の会話をしただけだった。

帰国してすぐに、京都の幼馴染がとしを訪ねてきてくれた。登別温泉に2人で行って泊まり、夜通し尽きない話を語り明かした。

夫と長男家族の呼び寄せ

永住帰国した2年後の昭和59(1984)年に、夫と長男家族が来日することになった。私費でなければ来られないので、長男夫婦は家を売り、来日の費用にあてた。就職保証は、二男が働いていた「板金の社長」が引き受けてくれた。来日するにあたって、夫と長男の話が食い違った。夫に聞けば、「自分は来たくなかったが、長男が来たいと言ったから、来た」と言うし、長男に聞けば、「『お前(長男)が行かなかったら、私も行かない』とお父さんが言うから(来た)」と言うため、最初はどっちの話が本当なのか分からなかった。しかし、孫が教えてくれた。長男の言うことが本当だった。としが夫のもとからいなくなったが、長男夫婦は2人とも仕事で出かけるので夫の世話をする人がいない。夫はとしのもとにすぐにでも来たかったが、「長男の嫁さん」の母親が反対していたため来られず、長男に当たっていたらしい。

としの一家は最初は登別で暮らしていたが、長男が札幌で働くことになって、全員札幌に引っ越すことになった。

夫の様子

としの夫は、来日してから、「ころ一っと」変わった。吉林にいる時は頑固だった

のに、全然違う。としが買い物に行く時にもついてきた。夫は「当たり前でしょ。自分、お金はないし、買った家もないし、何もかもない。そして、言葉も分かんない。おまけに日本へ来て、日本の政府にお世話にならなきゃならない。何を言うんだ」と言った。そんなことをいう夫をとしは「よく分かっている」と思った。夫は「しょぼん」としており、中国に帰りたがった。

札幌へ移ってから、夫は咳や痰が出てのどのあたりが「おかしい」と言うので、検査に連れて行った。すぐに、肺ガンだと分かった。しかも、末期だった。エックス線の治療後、しばらく病状は安定したので、夫は少しの間、中国に帰国することになった。二男が連れて帰り、娘のところに滞在した。としは、夫が帰国する時に、「帰りたかったら帰って、もしも嫌だったらこっち来ていいよ。どっちでもいいから」と夫に言った。夫は2か月で日本に戻ってきた。としが成田空港まで迎えに行くと、喜んで「もう早く帰りたい。もう行かない」と言った。夫にとってはとしのそばが一番いいということだろう。

夫は日本に戻ったものの、入退院を繰り返し、最後は9か月入院した後に亡くなった。最後まで、お酒も飲むしタバコも吸った。亡くなる前日、外泊許可をもらった。「一緒に飲もう」と言うのでとしも一緒に飲んだ。夫が飲んだのは1口だけだった。翌日、病院に戻り、亡くなった。夫が日本に戻ってから、3年経っていた。夫は頑固だったが、としには何でも話した。としを頼り、としに甘えていた。としは夫のために何でもした。中国で暮らしていた時も「日本人の奥さんでいいね」と周りの人から言われた。夫は、「幸せ、ほんとに。いつも勝手なこと言っても、子どもにお父さん、好かれていた」。としは、夫が死ぬまで、足を洗ったり、爪を切ったり、世話をした。

しかし、としは「自分で可哀想だな」と思う。「自分が好きで一緒になったらよかった」が、「それもなかった」。「義理」でずっと夫の世話をしたのだった。

一家集合と一人暮らし

夫が亡くなってから、遅れて長女や二女も来日することになった。保証人はとしがお手伝いとして働いていた先のガソリンスタンドを経営している社長がなってくれた。姉も妹も帰国した。としのきょうだいや子どもたちはみな日本で暮らすことになった。満洲に行き、「開拓団で4人きょうだい全部生きて帰った」家は、他に「ない」という。

現在、登別に住む姉をのぞいて、きょうだいや子どもたちは札幌で暮らし、孫やひ孫もいる。毎週、子どもや孫たちが訪ねてくれる。姉とは電話で話す。姉はリウマチで病院へ通い、としも心臓が弱く、何度か救急車を呼んだり入院をしたこともあるので、2人とも心配ではあるが、日本に帰ってこれたので「これで満足しよう」、そして「長生きしよう」と互いに言い合う。

一人暮らしのとしであるが、子どもたちには世話にならないと思う。そこまでは考えていない。1日1日を生きている。中国ではずっと大家族で過ごしてきたので、も

う1人の生活の方が気楽である。

そんなと時に、帰国して「生まれて初めて」好きな人ができた。歌手の「氷川きよし^{ひかわ}」である。顔貌も好きだけれど、若い男の人が「股旅演歌」を歌うのを聴いて、驚いた。子どもの頃から歌が好きだったが、中国にいた時も「股旅演歌」や日本の歌を「節目節目に」聴いて、気持ちが和み、勇気づけられた。今は「氷川きよし」の歌を聴くことが一番の楽しみである。

振り返って思うこと

振り返って思うことは戦争が終わった時のことである。「戦争に負けた、日本が負けたことは、誰も言ってくれなかったので、信じられなかった。開拓団の団長だとか、ああいう人、もう敗戦って分かっている、前から家族みんな日本で帰ってる。ずるいんだ。ああいう人はみんな。開拓団の人は一番可哀想だ。ちりちりばらばら。お偉いさん、全部、帰って…」。



聞き書きを終えて

松本としさんとは、平成14年(2002年)12月に初めてお会いしました。以前、2世家族の聞き取り調査を行ったことがあり、としさんはその時ご協力くださった2世である息子さんのお母さんにあたる方です。息子さん夫婦のお話の中にお母さんの話題が時々ありましたが、日本語の不自由だった息子さん夫婦にとって、としさんは本当に頼みの綱だったようです。いつか、そのお母さんにもお会いしてみたいと思っていましたが、こんなに早く実現するとは思いませんでした。年末の忙しい最中、息子さん夫婦ととしさんのお宅へ伺い、正式にお願いしましたところ、快くお引き受けくださりまして、平成15年(2003年)1月14日と2月1日の2回にわたって、お話を聞かせていただきました。息子さん夫婦のご紹介と、ご自宅ということで、最初からリラックスした雰囲気の中で話をお聞きすることができたと思います。

聞き取り方法については、フォーマル・インタビューとインフォーマル・インタビューの両方をミックスして行いました。あらかじめ主な質問事項を決め、「渡満前の生活」「満洲での生活」「終戦直後の状況」「中国での生活」「帰国後の生活」という大枠の流れで、順に進めてお聞きしました。お話の展開の中で、順序が逆になったりしたこともありましたが、確認を交えながらも、お話の腰を折らないように自由に語っていただきました。

としさんは、年齢的には「中国残留婦人」の範疇に入る方ですが、本人は結婚していない「娘」であったので、そう呼ばれることに抵抗を示していらっしやいます。やむを得ず結婚したことが、悔いになっているようでしたが、としさんの口から出てくるご主人の話題からは、としさんご自身はご主人を幸せにしたのではないかと思わずにはいられませんでした。好きな人と結婚したかったとしさんですが、日本に戻って初めて好きな人(歌手の氷川きよしさん)ができた嬉しそしておっしゃいます。

としさんは、中国で大変な苦勞を重ねられましたが、他の日本人に対して、あの人は「可哀想

だ」と何度おっしゃったことでしょうか。としさんのお母さんは収容所で亡くはなれましたが、お父さんやきょうだい生き残り、全員が無事に帰国できたことは奇跡としか言いようがないようです。だから、としさんには他の人の状況が可哀想に思えるのではないのでしょうか。

としさんは、日本国籍も変えず、いつも自分の意思をはっきりと持って生きてこられました。青春時代がなかった分、いつまでも心にときめきと微笑みを持ってお元気で暮らしてほしいと心からお祈りしています。(よしだ ゆみ)